

Museum News

秋田県立博物館ニュース



企画展

「わくわくたんけん夏まつり」 7/20(金)～8/26(日)

けん玉、ステレオ写真、古文書解読など28の体験型ブースを揃えた企画展。子どもたちの元気な声が展示室にひびきました。

目次

表紙・目次	P.1
企画展紹介	
(予告) 特別展「アンダー×ワンダー！」	P.2
(報告) 企画展「古伊 ^{ふる} 看板」	P.3
企画コーナー展紹介	P.4
(報告) 「ツツガムシに挑んだ秋田の医師たち」	
(報告) 「真澄地誌の諸相」	
学芸ノート	
(地質) はぎとり標本作製	P.5
(考古) 人と「モノ」とのいい関係を	P.6
わくわくたんけん室21	P.7
博物館教室・イベント等	P.8

平成24年9月22日(土)～11月25日(日)

特別展

アンダー×ワンダー!

北東北の考古学最前線



笑う岩偶 (秋田県指定有形文化財)

北秋田市教育委員会蔵

秋田県白坂遺跡で発掘された縄文晩期の岩偶。加工しやすい凝灰岩を削ってつくられました。謎のほほえみはモナリザをこえる!?



大型土偶頭部 (重要文化財)

文化庁蔵

岩手県萩内遺跡から出土した縄文時代の大型土偶の頭部です。目の周辺に見られる縦縞の文様や、唇の表現に特徴があります。仮面をつけたシャーマンを表現していると考えられています。



北東北の文化は厳しくも豊かな自然の中で3万年にわたって培われました。私たちは発掘された出土品を通して、そうした人々の知恵や祈りの姿に思いを巡らすことができます。

この展示では、現代でも通用しそうなデザインの土器や、謎めいた土偶など、多くの驚きを与えてくれるものの数々をご紹介します。現代の地表の下(アンダー)には、様々な驚き(ワンダー)の世界が広がっています。

皆さんも特別展「アンダー×ワンダー!」を通して北東北に生きた原始・古代の人びとの姿を心に描いてみてください。



クマ形土製品 (重要文化財)

青森県立郷土館蔵

青森市の尾上山遺跡から出土した土製品です。縄文人にとってクマは特別な存在でした。

イベントのご案内

特別講演会

- 11月3日(土) 午後1時～3時
- 講師: 大塚初重 明治大学名誉教授

ギャラリートーク

- 9月22日(土)、29日(土)、10月14日(日)、11月11日(日) 午後2時
- 当館学芸職員

「笑う岩偶」のレプリカ作り (1日5個限定)

- 会期中の午後1時30分～2時30分に受付
- わくわくたんけん室

入館料 一般 500円 大学生以下無料
休館日 毎週月曜日(ただし10/8は開館、10/9休館)

平成24年4月28日(土)～7月1日(日)

ふる 企画展 古イイ看板

企画展「古イイ看板」では江戸初期から昭和40年代頃までの各地で使われた看板を中心に展示しました。展示では秋田県内の3人のコレクターの方にお世話になりました。コレクターの方々の所蔵品と館蔵品あわせて170点ほどを、その内、秋田の看板は明治以降のもののおよそ20点を展示しました。

江戸時代の秋田の町並みの様子を伝える絵画資料として『足栗毛』『秋田風俗絵巻』(当館蔵)、『秋田街道絵巻』(秋田市立千秋美術館蔵)などがあります。これらからは、大型木製看板が多数掲げられている様子は確認できません。玄関障子に「しちや」というように業種や屋号が書かれていたり、軒先に商品を並べているだけなのです。明治時代になるとそれまでの商業活動の制限が廃止され、新規参入者が次々と現れます。古くからの商家も安穩としていられず、「商魂たくましい新参者」との競争に負けてしまうこともありました。それゆえ、屋根に店名や代表商品の名を掲げ、歩く人からも見えるように大型の看板も作られるようになりました。その様子は明治時代の絵葉書や写真で確認することができます。

さて、今回展示した看板の中には、角が丸く削られたものが2枚ありました。この看板を寄贈して下さった方に、その理由をたずねてみると「実は廃業後に玄関の登り板に再利用していたが、角が邪魔になって削ってしまった」ということでした。「用済みとなった木の看板は、適当な長さに切ってまな板や風呂の蓋に使われたり、風呂の焚き付けに使われたものもある」という話もコレクターの方から聞くことができました。現在まで伝わっている看板の貴重さをあらためて実感しました。

看板の「実際の使われ方」も現状に影響していました。外に常時掲げられていた看板は、風雨にさらされて風化してしまい、往事のまを保ってはいません。一方、建物の中で使われていた看板はそのようなこともなく往事のまを保っています。その差を見ると、きっとこの看板が作られた時にはもっと輝いていたことだろう、とも考えさせられました。考えれば考えるほど、看板の持つ魅力は尽きません。

コレクターの方々はその所蔵品を常日頃公開しているわけではありません。また、当館にしても常設展示室に展示していない館蔵品が多数あります。そのような常日頃公開されていない看板を集めて展示でき、博物館にとっても来館者にとっても貴重な機会となったと思います。

(歴史部門：戸島 毅)



『足栗毛』(当館蔵)に見る大町の風景(江戸時代)



ガラス乾板写真(当館蔵)に見る大町の風景(明治時代)



玄関の登り坂に再利用された看板(当館蔵)

平成24年7月7日(土)～8月26日(日)

企画コーナー展（菅江真澄資料センター）

真澄地誌の諸相

菅江真澄は、秋田に住むようになってから秋田六郡の地誌編纂に取り組んでいます。真澄と藩校明徳館助教・那珂通博との《軒の山吹》（文化8年(1811)）における会見は、秋田藩による地誌編纂の依頼を目的にしていました。このことは、幕府主導による全国的な地誌編纂の流れの中でとらえることができます。実際の地誌編纂は、文化10年からの秋田郡と雄勝郡の試行錯誤を経て、文政7年（1824）の平鹿郡から本格的に行われることになります。展示では、それまでの流れを、計画書である《花の出羽路の目》をまじえながら図式化して紹介することができました。

真澄が最後に取り組んだ仙北郡の地誌は、基本的には巻数順に巡村調査が行われたと考えられますが、記述の中に散見する執筆日に、遺墨資料や肝煎文書などの傍証資料を重ねることにより、巡村調査の年月日のある程度整理することができます。現存する肝煎文書だけではなく、今後、刊行本や新聞にかつて掲載された資料を洗い出すことによって、真澄の地誌編纂の実際ばかりではなく、真澄の実像がより鮮明になってくると思われます。

（菅江真澄資料センター：松山 修）



地誌編纂時における真澄の手沢本
（『六郡郡邑記』、大館市立中央図書館蔵）

※記録し終わった村には、朱墨の●印が付されている。



肝煎による書き上げ文書の控え

（『梅沢村諸御用万願書控』、仙北市・大石淳氏蔵）

※地誌の記述内容となる事項が、肝煎によって真澄に報告された。文政12年6月2日、真澄が雲然村（《月の出羽路仙北郡25》の親郷）から移ってきたことも記されている。

平成24年6月2日(土)～8月26日(日)

企画コーナー展（秋田の先覚記念室）

ツツガムシに挑んだ秋田の医師たち ～田中敬助・寺邑政徳～

ツツガムシは古くから秋田県内で“ケダニ”とよばれ、致死率の高い病気を引き起こすとして恐れられていました。風土病ともいわれた時代は、“ケダニ”診療専門の医師が存在し、病気を鎮めるための行事や神社もありました。西洋医学が普及し始めた明治初期に、当時の科学を駆使し、この病気に挑んだ医師が秋田にいました。生涯をツツガ虫病の克服に捧げた医師・田中敬助の生誕150年、そして寺邑政徳の没後50年という節目の年に、改めてその業績とともに、ツツガ虫病を取り巻く現代の状況を含めて展示紹介しました。

展示期間中は、生きているアカツツガムシを公開する貴重な機会となりました。

（秋田の先覚記念室：中村 美也子）



田中敬助のアカツツガムシのスケッチ
スケッチを始め、多くの論文などが展示を通じて新規に収集された。

はぎとり標本作製



安田海岸の露頭

今年度の自然展示室の展示替えコーナーでは4月から9月まで「祝 男鹿半島・大潟 日本ジオパーク認定 大地の博物館 安田海岸」と題した展示をおこなっています。小さいスペースでの展示に合わせ、露頭のポイントの小さめの剥ぎ取り標本作製するため3月の晴れの日を見計らい現地に行ってきました。

剥ぎ取る地点を移植ベラでならし、専用の接着剤を刷毛でたっぷり塗りつけます。柔らかい砂の層では塗りつけた接着剤が砂ごと流れ落ちることがあるので慎重になります。ある程度乾いてから、ガーゼを貼り付けさらに接着剤を塗りつけます。最初は採取場所の選び方が悪く接着剤が塗れなかったり、ガーゼを貼り付けるのが早すぎたためガーゼごと流れ落ちてしまったりと、なかなか大変な作業でした。接着剤が乾くのを待つ間に露頭の写真を撮りました。海が間近に迫っているため、あまり露頭から離れることができず、波の引くのを見計らって撮影します。約60枚撮影して、パソコンで合成しました。

3月は気温が低く植物が少ないので地層の観察には最適なのですが、接着剤はなかなか乾きません。できればもう少し待ちたかったのですが、暗くなる前に最後の作業に移りました。移植ベラを使いながら慎重にガーゼと接着剤がしみこんだ地層の表面を一緒に剥がします。砂の層は容易でしたが、亜炭層の部分は移植ベラで切りながら2人がかりで剥ぎました。

作成した剥ぎ取り標本の一つが右の写真です。実際の地層を裏側から見ることになるため鏡に映したようになります。黒い部分は亜炭です。沼などに堆積した植物が石炭化したもので、この時代は陸化していた証拠です。亜炭に挟まれた火

山灰層もしっかり剥ぎ取ることができました。この火山灰（阿蘇1）は約25万5千年前に千km以上離れた九州の阿蘇から飛んできたものです。

安田海岸の露頭は、阿蘇1のほか3枚の広域火山灰が見られますが、この広域火山灰などの調査から約50万年以上前から8万年前ほどの間に堆積したことが推定されます。この時代には、氷期、間氷期の大規模気候変動が何度も起こり、それにより海面が上がったり下がったりしていました。安田海岸の露頭はこの海面昇降を目の当たりにできる貴重な場所なのです。

剥ぎ取った標本は、車に積んで帰ったのですが、接着剤が乾ききってないため、窓は閉められません。車の中でこの日一番寒い思いをしました。

（地質部門：大森 浩）



上から亜炭層、阿蘇1火山灰、亜炭層、砂の層

人と「モノ」とのいい関係を

当館の人文展示室では、博物館資料である「モノ」を通して秋田の3万年にわたる歴史を分かりやすく紹介しています。「モノ」はたんに「モノ」でしかなく、そこに「命」が吹き込まれることはありません。「モノ」が「生命体」になることは現在の科学ではあり得ないことですよね。しかし、展示されている「モノ」をじっくり鑑賞しているとどうでしょう。そうした「モノ」たちは私たちの「心」にいろいろと働きかけてきませんか。歴史を振り返ると、「モノ」は「命」とは異なった働きをもっていることが分かります。そして、過去に使われた、「道具」としての「モノ」を研究して「人」について考える学問を「考古学」といいます。

「モノ＝道具」と私たち人間との出会いはいつ頃から始まったのでしょうか。DNAや化石の研究によれば、人類がサルから分岐したのは今からおよそ700万年前と言われています。その頃はまだか弱い存在で、大型肉食獣の餌食となることもあったようです。それが今から約250万年前になると、人類は初めて道具というものを作ります。それは片手でつかめるほどの川原石の一端を打ち欠いて作った「礫器・握斧^{れいぎ ぐりこ}」というものです。「モノ」の誕生です。この握り斧は重量があり、鋭い刃先もついているので、素手で動物と対峙するよりも相当な威力を発揮しました。捕食される「か弱い存在」から大きな一歩を踏み出したのです。

ところで、人類は猿人、原人、旧人、新人というふうに進化したと教科書的には説明されます。私たちは新人（ホモ・サピエンス）に含まれ、その誕生は今から19万年前のアフリカと考えられています。最近ではチンパンジーでも簡単な道具を使うことが知られていますが、新人はそれ以前の人類と比べて「モノ」の発明・開発・伝授に非常に長けています。アフリカから世界中に広がった人類は、あらゆる環境に適応していきました。赤道直下の暑い地域では長身で肌の色が濃く、高緯度地域では短身で肌の色が薄いなど、自分の身体を変化させもしましたが、それにもまして自ら作り



出した「モノ」をどんどん開発・改良していくための技術を発展させました。たんなる「モノ」ですが、「モノ」なくしては人類は激変する環境に適応できず、すでに絶滅していたことでしょう。

こうした「モノ」とそれを支える技術は私たちの暮らしを非常に便利で豊かにしましたが、現在のわたしたちはそうした技術や「モノ」と本当に上手く付き合っているのでしょうか。科学技術先行型の文明の発展と引き換えに失ったものも多くあるかもしれません。東日本大震災を経験した昨今はそういう思いをとくに強くします。

当館の考古部門では、人間と「モノ」との関わりを研究し紐解くことによって、私たちが歩んできた道を正しく理解し、これから未来に向かって歩むべき道を照らし出すことができればとの思いを抱きながら、日々、研究や展示などの業務に取り組んでいます。

写真は、1万年間にわたって秋田県で作り続けられた縄文土器です。土器は、粘土を火にかけると硬くなって元には戻らないという化学反応を利用した初の人工品です。これらの土器には色々と特殊な文様が描かれています。文様の意味するところは今となっては分かりませんが、ある決まったルールに従って描かれていることから、土器もたんなる実用品としての「うつわ」ではなく、縄文人の心や祈りが込められた「モノ」だったようです。こうした縄文土器を見ると、私たちとは違った「モノ」と「人」との関係に触れた気がします。

（考古部門：吉川 耕太郎）

わくわく たんけん室

② ミッションをクリアして お宝をゲットせよ!

わくわくたんけん室からミッションを発信!! 挑戦者は、わくわくたんけん室でミッションシートを受け取り、シートに示されたミッションをクリアするべく博物館内をまわります。各展示室のミッションシートがあり、挑戦者は好きな展示室にまつわるシートを2つクリアするとお宝をゲットできます。展示品を見ながら問題を解き、楽しく学習できるイベントです。

イベントに、複数回参加することで、秋田県立博物館の収蔵する展示品への理解を深めることができます。

ミッションをクリアするとゲットできるのは、次のようなお宝です。博物館ボランティアの皆さんと採集した貝殻や木の実、職員手作りの昆虫シール等々。身近な物もよく見ると不思議で魅力的! 博物館ならではの景品(お宝)です。



ミッションのお宝

ミッション

カレイの仲間の肛門(お尻の穴)はどこ?

アクリル標本をよく見て、写真の中に矢印を書こう。



※ヒント: ムシガレイやマコガレイが分かりやすいぞ!



こんなミッションが挑戦者を待つ!

わくわくたんけん室は全ての展示室と連動して郷土の歴史や取り巻く自然、培われてきた文化などを自身体験してもらう展示室です。

このイベントは、わくわくたんけん室を楽しんでくださるお客様に、いつもとは違う見方で展示室を知ってほしいという学芸職員の願いから生まれました。



1000人目の挑戦者とその家族。左:秋田県立博物館副館長

挑戦者1000人目、ミッションクリア

第3回のイベント(平成24年6月2日~7月1日の土日10日間)は連日大勢の挑戦者で賑わいました。1084人の挑戦者が見事ミッションをクリアしました!

次回の開催は秋!

平成24年10月6日~11月4日

多くの挑戦者をお待ちしております。

博物館教室

今年も博物館を会場にいろいろな教室・講演会が行われました。



化石と地層の観察会



昆虫教室～採集と標本づくり～

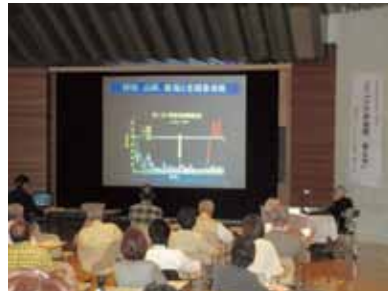


楽しい絞り染め

このあとも色々
予定されていま
あるので、ホーム
ページ等で要
チェック!



名誉館長館話～歴史と文化を語る～



先覚講演会～ツツガ虫病、昔と今～

イベント

ゴールデンウィークにあわせて行われました。



真澄に学ぶ教室講演会 I
～方言と昔話―内田武志の軌跡①～



自動演奏ピアノ実演



分館 旧奈良家住宅～軒の山吹～



ギャラリートーク

ふるさとまつい広場



ヒタ絵どうろう



天神信仰